



巻頭言

『神業』を使いこなす高邁な哲学を持って

Hold on to the noble philosophy that commands
“technologies of God”



稲盛和夫 Kazuo INAMORI

京セラ名誉会長

私は大学時代、当時最も人気のあった応用化学を専攻していました。なかでも、石油化学といった有機化学が私の専門で、将来は薬品会社などに入って、新薬を開発したいという希望を持っていました。

しかし、卒業の年である昭和30年は、終戦から10年しか経っておらず、また朝鮮戦争後の不況期でもあり、たいへんな就職難でした。そのため、私は自分の希望をかなえられず、京都にある碍子を製造する会社に入社することになり、そこでは、無機化学の分野ではありますが、物質を合成するという仕事に携わることになりました。その後、私の技術を認めて下さった同志の方々とともに京セラを創業させていただき、以来、ファインセラミック技術を応用した多種多様な製品を世に送り出してきました。

私を含め化学に携わる者は、有機であれ無機であれ、このように研究室や企業において新しい物質や製品を次々と生み出してきています。その中には人類社会の発展に多大な恩恵をもたらしたのも数多くあります。例えば、化学技術を応用した肥料や農薬が開発された結果、飛躍的な食糧増産が可能となりました。また、プラスチックをはじめとする人工化合物は、加工に適していることから、大量生産される日用品や各種工業製品の原材料として使用され、近代物質文明を支えてきました。

しかし、よく考えてみますと、自然界に存在しなかった新しい物質をつくり出すという行為は、近代になって初めて可能になったことであり、それまで神しかできないと思われていたことです。つまり、神のみしか持ちえなかった能力を我々人類が手に入れ、自由に駆使し始めたということの意味しています。私はこのことを、人類は「神業（かみわざ）を手に入れた」と表現しています。

しかし、最近では、人類がつくり出した新しい物質は負の側面も持っていることが明らかになってきました。例えば、強力な洗浄作用を持った化学洗剤を各家庭が使用し、それが分解されないままに河川や海に流入すれば、水質汚染の大きな原因となります。また、塩化ビニール製品を焼却する過程で発生するダイオキシンは、発ガン性があることが判明しています。

このように、新しい物質をつくるという「神業」は、我々の生活を豊かにする素晴らしい製品も生み出す一方、大きな害を生み出す物質もつくり出しているのです。それは、全知全能の神しか使えなかった「業（わざ）」を、全知全能ではありえない人類が、自らの限られた知恵を使い、自らの欲望のおもむくままに駆使するようになった結果だとも言えます。

それでは、そのような「神業」と呼べるような高度な技術を使えるようになった我々研究者はどのようにすれば、真に人類社会の進歩発展に貢献できるような製品を生み出すことができるのでしょうか。

私は、最も重要なことは、研究者や化学者が人間として正しい思想や哲学を持つことであると考えています。無論、研究者や化学者は自由闊達に思考を巡らし、独創的な試みに挑戦していくべきです。しかし、そうした活動の根底には、自分は「世のため人のために役立つ」ために研究開発をするのだという確固たる哲学がなければなりません。つまり、新しい技術を生み出し、新しい発見をしていこうとするときに、それが自分のエゴではなく、「世のため人のために」に本当に役立つものなのかを徹底的に考え尽くさなくてはならないのです。そのために必要になるのが、研究者としての哲学なのです。

「神業」を手にした現在、化学者は、もちろん自らの能力を向上させるための研鑽を怠ってはなりません。それと同じような熱意を持って、自らの考え方、哲学の向上にも力を入れなければならないのです。そのように能力だけでなく人間としても向上を目指す人だけが、人類に物心両面の幸福をもたらすことができるような成果を生み出すことができるのだと私は確信しています。

英訳版は 484 ページをご参照下さい。English version, see pp 484.

© 2011 The Chemical Society of Japan